

高等学校における教科指導の充実

国 語 科

「話すこと・聞くこと」の指導の工夫

栃木県総合教育センター  
平成20年3月

## ま え が き

教育課程実施状況調査や学力に関する国際的な調査では、日本の高校生の学力の状況や学習に対する意識などが明らかにされ、文部科学省等からも学力向上のための様々な対策や提言がなされています。このような中で、平成19年4月には、小学校第6学年と中学校第3学年を対象に、国語科、算数・数学科の2教科で、「全国学力・学習状況調査」が実施されました。10月末に公表された調査の結果から指摘された課題は、小・中学校においては喫緊の課題となっていますが、一朝一夕に解決することは難しい問題であると思われます。したがって、小・中学校における現在の課題は、とりもなおさず高等学校の課題としても引き継がれることになるでしょう。また、12月には、2006年のPISA調査の結果も公表され、科学的リテラシーをはじめ、数学的リテラシー、読解力を向上させるための対策が急がれる結果となりました。

各学校においても、教育活動の充実・改善に努めているところですが、特に教科指導においては、限られた時間の中で効果的な指導を展開して、生徒の学力向上を図ることは言うまでもありません。

これらのことを踏まえ、総合教育センターでは、「高等学校における教科指導の充実に関する調査研究」に取り組んでいます。この調査研究の目的は、基礎・基本の確実な定着を図るための授業改善を目指して、教科指導の在り方について研究し、その成果を普及することにより、学力の向上に資することにあります。

今年度は、国語科、地理歴史科、数学科、理科において、教育課程実施状況調査の調査結果等から指摘されている課題を踏まえ、その解決を図るための授業改善の方策等について研究に取り組みました。研究の成果をまとめた本冊子を、各学校の実情に応じて有効に御活用いただければ幸いです。

最後に、今年度の調査研究を進めるにあたり、御協力いただきました研究協力委員の方々に深く感謝申し上げます。

平成20年3月

栃木県総合教育センター所長

五 味 田 謙 一

# 目 次

はじめに	1
事例1 グループによるリレーブックトーク	3
事例2 話し合いと相互評価を通して練り上げるプレゼンテーション	13
事例3 調べ学習の成果をポスターセッションで発表する	19
事例4 「話すこと・聞くこと」の言語活動を通して『羅生門』を読み深める	25
おわりに	35

## 「話すこと・聞くこと」の指導の工夫

### はじめに

国語科では、教育課程実施状況調査やOECD生徒の学習到達度調査（PISA）等の結果から指摘されている課題を踏まえ、学習指導要領の趣旨に則り、今年度の研究テーマを「『話すこと・聞くこと』の指導の工夫」として、研究に取り組んだ。

2007年4月に公表された、「平成17年度高等学校教育課程実施状況調査 教科・科目別分析と改善点」によると、「生徒質問紙調査と教師質問紙調査との比較」において、生徒と教師との意識差が明確にみられたものの一つとして、「人前でスピーチや説明をすること」が挙げられ、次のような分析及び指摘がなされている。

#### ○生徒と教師の意識差

「人前でスピーチや説明をすること」について、教師の約半数は「生徒は興味を持ちやすい」と答えているのに対して、生徒の半数以上は「きらいだった」と答えている。しかし一方で、「普段の生活や社会生活の中で役に立つと思った」と半数以上の生徒が答えており、学習の有用性については教師との意識差はないと言える。つまり、生徒はこの言語活動の意義や必要性は認めているものの、その学習は嫌いなのである。見方を変えれば、3分の1を超える教師が「生徒は興味を持ちにくい」と答えているのは、学習活動の中で生徒のそのような思いを切実に感じているからなのかもしれない。この傾向は前回調査と同様の傾向であり、この言語活動については、一層の指導の改善が求められる。

そのためには、まず、指導が単発的で、単調なものとなっていないか、生徒に必然性を感じさせるものになっているか、実生活や学習活動の様々な場面で活用できるものになっているかなどの視点で、指導の在り方を見直す必要がある。

#### 人前でスピーチや説明をすること(生徒質問紙・教師質問紙)

	好きだった	きらいだった	普段の生活や社会生活の中で役に立つと思った	役に立つと思わなかった
生徒	9.4% <10.4% >	56.6% <47.7% >	51.7% <44.0% >	8.1% <13.7% >
	生徒は興味を持ちやすい	生徒は興味を持ちにくい	※ < >内は平成14年度調査結果	
教師	48.1% <52.5% >	34.7% <36.6% >		

「生徒質問紙調査と教師質問紙調査との比較」では、上の記述に続いて、「文学的な文章を読むこと」の記述（事例4の28頁参照）があり、さらに次の指摘に続く。

指導に当たっては、このような生徒の意識に十分配慮する必要がある。具体的な指導においては、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」のいずれの授業においても、ともに学び合う中から自分の力が伸びたと意識できるような指導を通して学習の成就感を味わわせ、対人関係能力やコミュニケーション能力、ひいては伝え合う力、生きる力の伸長へとつなげていくことが大切である。

また、PISA調査においては、「読解力」の分野で日本は2000年調査の8位から2003年調査の14位へ大きく順位を下げ、2006年調査では15位となった。（総合平均得点では上位2位グループに位置する。）PISA調査における「読解力」とは、「自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参画するた

めに、書かれたテキストを理解し、熟考する能力」と定義されている。PISA調査で課題とされた「読解力」を育むためには、学習指導要領に示された、「話すこと・聞くこと」「書くこと」及び「読むこと」の各領域にふさわしい教材や言語活動例を調和的に取り上げ、指導の改善を図り、国語力を総合的に高める必要がある。

以上のような状況を踏まえ、本研究調査において、平成17年度は「書くこと」、平成18年度は「読むこと」に関する事例を扱い、今年度は「話すこと・聞くこと」の指導の工夫・改善の研究に取り組んだ。

各事例で扱った単元は次のとおりである。

**事例1** グループによるリレーブックトーク

一つのグループにつき一つのテーマを設定して、テーマに基づく複数の本をグループ内でリレーしながら紹介させる指導。

**事例2** 話し合いと相互評価を通して練り上げるプレゼンテーション

中学生向けの学校紹介のプレゼンテーションのシナリオを、グループでの話し合い活動や、相互評価を通して作成させる指導。

**事例3** 調べ学習の成果をポスターセッションで発表する

修学旅行の事前研究として沖縄についてグループで調べたことを、ポスターセッションで紹介させる指導。

**事例4** 「話すこと・聞くこと」の言語活動を通して『羅生門』を読み深める

グループでの話し合いを通して、『羅生門』を読み深めさせる指導。

**<研究協力委員>**

栃木県立小山市城南高等学校	教 諭	横 山 幸 央
栃木県立田沼高等学校	教 諭	天 貝 恵 美
栃木県立大田原女子高等学校	教 諭	赤 羽 聖 子

**<研究委員>**

栃木県総合教育センター 研究調査部 副主幹 吉澤正光